

新刊紹介

巴和小辭典

雲井昭善編

凡そいかなる學問に於いてもその研究遂行上、その分野の辭典の缺如は大いなる障害である。この面からみても本辭典の出版は、日本に於ける原典研究史の一頁を充分に飾りうるものであらう。

原始佛教の分野が開拓されて以來、辭典としては R. C. Childers 氏の A. Dictionary of the Pali Language (1874; London) や T. W. Rhys Davids 及び William Steed 兩氏の Pali-English Dictionary (1921; P. T. S.) 等が出版されている。

然しこれ等の辭典は、高價であつて容易に入手出来ないのが現状である。外國にこの様な辭典の出版があるのに比して、日本では本格的な辭典の出版は残念ながら今迄なく、こうした辭典の出版は、日本佛教學界の久しく待望していたところである。

それが今日《巴和小辭典》となつて、本學の雲井教授によつて出版されたことは、一人その方面の研究者のみならず佛教學界全體にとつての大いなる曙光となることであらう。

本辭典の特色については、編者自から一筆しているので、今その大略を記す。

「用語は概ね、四阿含 (P. T. S 本) と南方論部 (同) の代表論書の中から選出し、諸辭典の譯語と南傳和譯末尾索引の譯語を参照し、且、巴利と漢譯との連關性について特に留意した」と。

又本書は、Pali 語と Sanskrit との關係を重視する意味から、Sanskrit を要する單語にはそれを合わせ擧げている。そして更に卷末では、簡単な文法と一般的な梵巴聲音變化對照表をも加えている。

ところで本書は第一回分冊出版から六年餘して完成されたが、その間には編者の約一年半に亙る療養生活等もあつて、多大の勞苦が推察される。がその出版意圖は、ひとえに『一に以つて初學徒の原典講讀の便に資することを念願』した學者の一面にあるのであらう。餘談になるが、この出版について昨年東大で行なわ

れた日本印度學佛教學會第十二回學術大會の第2部會で、長老格の長井眞琴博士が本書を取りあげて、絶讃されていたことを思い出す。

以上いたらぬ紹介ではあつたが、最後に一筆加筆したいことがある。それは本書の編者雲井教授は昨年十二月、文學博士の學位を得られているが、その副論文がこの巴和小辭典であつたことである。

このことは、本書のもつ學問的價值を單的に示している、と云えるのではなからうか。

昭和36・4・1・法藏館・B5・三六〇頁・函入・二九〇〇圓(渡邊)

教行信證の諸問題

稻葉秀賢著

本書の序言にも記されてある如く、眞宗學は、「教行信證」に説き著わされた眞實普通の法を、その時代々々に於ける一人々々の宗教的自覺の立場から、顕受開顯してゆくものに他ならない。その爲には、教行信證自體が傳承と己證の美事

な結合の上に成立つてゐる如く、過去の先哲達が成し遂げられて來た仕事に對して、極めて謙虚でなければならぬと共に、時代に於ける自己自身の問題に對して、何處までも忠實でなければならぬことは言うまでもない。

本書の著者が、先哲の學問に接すること極めて敬虔であると共に、自身の問題に對して常に嚴格であることは、周知のところである。本書はかかる態度において、著者が多年に亘り、研究年報・宗學院論輯・學報等に發表して來られた數多くの諸勞作の中から、主要な論文十編を選び出し、學位論文として整理編纂せられたものであり、次の十章に依つて構成せられている。

- 一、教行信證の構造
- 二、眞實教の性格
- 三、教行信證に於ける教行の關係
- 四、教行信證に於ける眞實行の意義
- 五、行卷に於ける曇鸞教義の展開
- 六、信卷について
 - 信卷別撰説と關聯して —
- 七、信卷の中心課題
- 八、常行大悲の益について

九、還相廻向の表現

十、三願轉入の實踐的意義

第一章の教行信證の構造は、本書の總論と言うべきものであり、數多くの教行信證概説の中にあつても、優れたものの一つであると言えよう。著者はそこで特に選擇集と教行信證の一節を設けて、元祖教學と宗祖教學の關係について詳細に論證せられているが、それは或る意味において本書の基調をなすものであり、著者は本書において教行信證に顯わされた淨土眞宗の教學こそ、元祖に依つて開宗せられた淨土宗の眞實義を眞に開闢したものであることを、解明しようとし、それであるのであり、その課題に對する應答は本書において見事に成し遂げられている。

第九章還相廻向の表現も、第一章と同様に教行信證概説の役割を果すものであるが、これは證卷前半までを往相の卷とし、後半以降を還相の卷とせられたもので、著者独自の畫期的論文であると言わねばならない。

他の八章は第一章に提示せられた教行信證の主要問題につき、詳細に論證せら

れたものであり、第二章では大經が眞實教たる所以を極めて精緻な論理でもつて辨證せられ、第三章第四章第五章では宗祖教學の獨自性が、主として元祖教學との密接な關連性のもとに明確に捉えられ、第七章では信卷の中心課題である三信釋が極めて平易に而も理路整然と論述せられて居り、第八章第十章では著者の根本的課題とも言ふべき親鸞教の實踐的意義が、宗學的傳統に立脚しつつ明確な態でもつて著わし示されている。

尙第五章の行卷に於ける曇鸞教義の展開は著者の多年に亘る宗學的研鑽を如實に示すものであり、論註の優れた概説書の役割をも果たすものとして、注目すべき勞作である。

以上本書の概略について紹介したが、教行信證に關する優れた研究書として、是非とも諸賢の座右に置かれることを願つて止まない。

A5版・三五五頁・一〇〇〇圓・法藏館
(橋谷)